



東川町との縁

編集部：まずはじめに、東川町に移住するまでのことを教えてください。

セキさん：私の夫は家具のデザインをしていて、その工房が東川町にあったご縁で、5年ほど前に今の家を譲ってもらった機会を得ました。

夫を中心に最初は家の掃除から始まり、リノベーションを進めて、家族は夏休みと冬休みに来て過ごして、知り合いもできて、ということが3～4年続きました。上の子が就学するタイミングで移住してきたのが今年の4月です。

編集部：家を譲ってもらった時は、移住しようという考えはあったのでしょうか。

セキさん：まだありませんでした。私にとってはセカンドハウスというか、まだそこまで踏み切れていなかったというか。

編集部：移住を決めたきっかけのようなものがあったのでしょうか。

セキさん：通っているうちに、東川町の森のようちえんに参加するようになったのが、きっかけですかね。小さい子を育てていると、親子でコミュニケーションする、親子で参加できるコミュニティがすごく大事です。親子単位でできる活動と言いますか。

もちろん東京の仲間もものすごく楽しかったんだけど、東川の方でも親子の仲間で楽しく過ごせるようになって、価値観が近いと思えるような人たちと出会えたことが大きいです。それと、東川は大きな自然にあふれていて、これくらいの小さい子どもが育つのにすごく良い環境だなと改めて思って、「じゃあ上の子が小学校に上がるタイミングでこっちにこようか。」という話に夫婦でなったのが2年前ですかね。

学びと実践

編集部：パーマカルチャーの資格を取られたとお聞きしました。移住して実践する場があると想定した上でのことだったのでしょうか。

セキさん：パーマカルチャーについては、前々から興味はありました。藤野エリア（神奈川県相模原市藤野）は特にパーマカルチャーの活動が盛んな場所で、いつかは藤野のパーマカルチャーデザインコースの授業を受けてみたいと思っていました。けど受講のためには藤野に通う必要があったので、子どもが小さいうちは無理だと諦めていたんです。そしたらこのコロナ禍で、そのコースがオンラインになったんです。オンライン授業なら私も参加できると思い、前々から勉強したかったのでちょうどよい機会でした。

もちろん北海道で暮らすことが目の前にあって、ちょうど移住の1年前から毎週水曜の夜に授業を受けて、1年間かけて資格を取りました。資格と言っても、まだヒヨッ子なので、今も勉強中です。

編集部：パーマカルチャーデザインコースでは、どういった事を勉強するのでしょうか。

セキさん：とても多岐に渡りますが、「持続可能な地球を作ろう。」という大きな目標の中、そのためにはどんな森をつくるべきか、どんな木を植えるべきか、ということや、もう少し小さな単位の視点だと「じゃあここに畑を作りましょう。」「食べるものは自分で育てましょう。」その時に例えば「北海道だったら？」「東川だったら、何を育てるべきか？」「どんなものとどんなものを植えると相性が良いか、悪いかなど」等について考えます。あとはどう生きていこうかとか、コミュニティの作り方とかについて、話し合いながら考えていく授業でしたね。

くらしかた・すまいかた

Vol.31

東川の家

移住の後の暮らし

北海道東川町。人口8300人の小さな町は、北海道のほぼ中央に位置し、日本最大の国立公園「大雪山国立公園」の区域の一部になっています。

クラフトの町としても名が知られており、町内には木工製品の工房が点在しています。

大雪山の豊富な伏流水が湧出するため、北海道内で唯一上水道のない町（地下水利用）としても有名です。

旭川空港からのアクセスの良さも相まって、年々移住者が増え続けています。

今回はそんな東川町へ移住したセキユリヲさんに、現在の暮らし方・住まい方について、お話を伺いました。



取材・編集：(株)地球工作所 Earth Planning & Work,inc
取材協力・写真提供：セキユリヲさん



編集部：テーマが多岐に渡るの、暮らしや生活に様々な要素が入ってくるからなんでしょうね。

セキさん：最初はパーマカルチャーって農業のことを勉強するのになって捉えていたんですが、実はそれだけでは全然なく、「人としてどう生きていくか。」という哲学的なこともすごく含まれる内容でしたね。

本当に学びになったし、もっとこれから深めていきたいです。

雪のある生活

編集部：北海道というと、雪が降ったりして、その間は農業とか、地面を使ったことがしづらくなると思うのですが、その辺りはいかがですか。

セキさん：そうなんです。それはすごく実感しています。パーマカルチャーのデザインコースで学んだことを活かしてみようと、意気込んで、庭を掘り起こしてみたんですが、この辺りの土ってすごく固い。雪に踏み固められて、カチカチになっているんですよ。もともと畑をやっていた土ではないので、2m四方の畑を掘り起こしただけでもすごく大変でした。近所の仲良くなったおじ

いちゃん、おばあちゃんが見るに見かねて、自分たちの畑を貸してくれて、今はそこで一緒にやっています。

編集部：それは心強いですね。

セキさん：それもすごく良い経験でした。畑をシェアさせてもらうことが、人と分け合って生きていくことに繋がっていて。畑の作業を通してコミュニケーションも図れるし、とても楽しいです。

編集部：自然の多い場所だし、庭も広いし、家庭菜園とかすぐできそうなイメージですが、冬の間ずっと雪があるような土地では、雪が融けても、その影響が残っているんですね。

セキさん：雪によって耕作した土地がいったんリセットされる感覚です。私も本当に初めてで、春になったらどうなるのか。

編集部：雪はいつ頃から降り始めるのでしょうか。

セキさん：12月中旬位から、本格的に降るのが年末からでした。1、2、3月は雪に閉ざされていて、4月でやっとちょっと春っぽくなって、お花見ができるようになるのがゴールデンウィークあたりです。東京からすると1か月遅れくらいの感覚です。私はスウェーデンで1年間暮らしたことがあるのですが、東川の気候はスウェーデンに近いです。生えている木とか植生とか、相性のよい野菜とか、とても近い感じがします。

編集部：雪は冬の間、ずっと降っているのでしょうか。

セキさん：今年は意外と降っていませんね。東川は本来、雪深い土地らしく、移住してくる前に「雪かきは大変だ」と言われていたので、けっこう心構えをしていたんです。でも今年はあまり雪の量が多くなかったので、拍子抜けしました。

編集部：雪かきをしなくてはいけない基準があるのでしょうか。

セキさん：タイミングとしては、雪が降ったら雪かきをする。あんまり放っておくと、雪が固くなってかえってやりづらくなるので、なるべく雪がフワツとしているうちに履いちゃった方が楽なんですよ。

自然の中でのびのび育てたい

編集部：東川町は移住者が多いそうですが。

セキさん：多いです。小学校のPTAの集まりに行くと、8割は移住者でした。だから「よそもの」という感じは全然ないです。もちろん地元の人もいて、田んぼを持っている農家さんとかは地元の人ですね。

編集部：移住してきた人たちは子育て世代が多いのでしょうか。

セキさん：やっぱり多いですね。うちの周りは東川町の中でもだいぶ端の方で、まわりにはおじいちゃん、おばあちゃんが多いです。

東川町の中心部には移住者が多く住んでいて、モダンな建物の小学校もあり、フィンランド教育を取り入れていたりしています。子どもの数も、1学年2クラスくらいで、まあまあ多いです。

私の子供が通っている所は小規模な小学校で、全校で18人しかいません。でもその分、先生の日も届きやすく、生徒一人ひとりに手厚いところが良いです。今年は1年生が1人しかいませんでしたが、移住者が増えていて、来年、再来年の新入生はだいぶ増えると聞いています。

編集部：ご自身はどんな子供時代をすごされていたのでしょうか。

セキさん：私は千葉県袖ヶ浦の出身です。袖ヶ浦は千葉県の中でも米所で、田畑に囲まれて育ちました。小学校まで、子供の足で片道45分かかりましたが、近所の友達と一緒に、野山で遊んだり、湧水を飲んだりしながら通っていましたね。だから小学校時代は自然の中でのびのびと育った感があって、その経験が今の「自分の子供たちにも自然の中で育てたい」という気持ちにつながっていると思います。





1. 自宅のデッキから見える夕焼け。2. 水回り等の設置以外は、ご主人が中心となって自分たちで施工した。木材は地場産のものを使い、壁はしっくいを塗った。3-4. 庭のデッキは「手仕事の会」の会場にも。5-6. 庭先で友達家族で集まって草木染めを楽しむ。物だけではなく、楽しい時間を共有できるコミュニティが、暮らしを豊かにしてくれる。

東京にいる頃は、子供を外で遊ばせたいなと思っていても、まず公園に連れて行くというステップがあったんですが、東川の暮らしではそれがありません。「その辺で遊んでおいで」と言って、子供だけで外で遊べる。

編集部：「その辺」というのは、どの位の範囲なんでしょうか。

セキさん：自宅に庭があって、そこなら大体目が行き届くし、家の前に道路があるんですが、ほとんど車が通らないので、道路で遊んでも大丈夫です。

前はマンションを出れば車がビュンビュン通っているような所だったから、それに比べたら安心感があります。

編集部：家も以前より広くなったのでしょうか。

セキさん：広くなりました。前は都心のマンションで、80m²位の広さでしたが、家族4人で住むには狭かったです。それに上下左右に人が住んでいるし、2人の元気な子供たちが生活するには、音の問題などもあって大変でした。ご近所さんにはご迷惑をおかけしたと思います。

特にコロナ禍で、家にいないといけな期間は大変でした。

編集部：そのマンションには長く住んでいたのでしょうか。

セキさん：10年くらい住んでいました。マンションの中庭みたいなところに木がたくさん生えていて、自分の部屋からもその緑が見えていたところが気に入っていました。

編集部：セキさんの中で、部屋の中から見える緑の多さというのは大事なポイントなんですか。

セキさん：そうですね。その前に住んでいた小さな団地でも、窓から見える緑に救われていたと思います。

編集部：東川の家の写真を見ていると、窓からの眺めがあまりに素晴らしくて、童話の世界に出てくる家のように感じたのですが、窓の位置はリフォーム前と変わっていないのでしょうか。

セキさん：意識して、景色がよく見える位置に窓を開け直しています。あとサッシも窓枠が木のもので、北海道でも大丈夫な断熱性の高いものを入れています。

窓枠以外も、リフォームする際には、意識して北海道産のものを使っていますね。壁はしっくい、夫が塗りました。

1年間の暮らしの中で

編集部：移住から1年間、暮らしてみてもいかがでしたか。

セキさん：自然あふれる環境が気に入っていますね。季節を感じながら、自然と共に生きている感じがします。

毎日、何気なく見ている空もとても美しく、見とれて家に帰れなくなるくらいです。

車で子供の送り迎えしている時も、「写真が撮りたいな」と思って、車を止めて写真と撮り始めると、「あ、あそこも撮りたい」「ここも撮りたい」と何度も何度も繰り返して、家に帰れない(笑)。

春先に、渡り鳥が何十羽も隊列を組んで飛んでいるのを見たとき、本当に「私は今、絵本の世界にいるのかな。」と思うくらい、不思議な感覚でした。

春夏秋冬ごとにいろんな美しさがあって、例えばたんぼに水が張ると水がすごくきれいだから、山がたんぼの水面に水鏡のように映りこんだりするのを見てうっとりしたり。秋は秋で紅葉が真っ

赤、真黄色になってすごくきれいです。

編集部：定住される前にも、季節ごとの休みで滞在されていたとのことですが、やはりずっと住み続けるのと違いますか。

セキさん：全然違いますね。細かい変化に気づけるといいますか。

同じ雪でも降りたての雪と、4月入ってからの雪、春が近い雪景色は違うんですよ。昔、北欧に行った時に、北欧は冬が長いから、「白」という色だけでも、何十種類もの表現があることを知識として学びました。今になってそれが「あー、わかるな。」と実感できるようになりました。同じ白なのに、すごい細かい微妙な差があるんですよ。

編集部：日本だと藍色や緑色の種類がたくさんありますが、自然環境が「色」の表現と深くつながっているんですね。

セキさん：自然環境が豊かな分、生き物もたくさんいて、渡り鳥だけでなく、シカやキタキツネ、ウサギなどもよく見かけました。

分かち合うコミュニティを

編集部：これからやってみたいことなどありましたら、教えてください。

セキさん：「コミュニティづくり」ですかね。自分の身の回りの、友達同士の話なんですが、例えば何家族かで集まって「手仕事の会」をする時は、料理が得意な人が、みんなの分のお昼をお弁当として作ってくれました。そしたら手仕事を教えてくれる人と、お弁当を作ってくれた人の間で、物々交換できる。私もお弁当を食べるから、じゃあ私は何を物々交換しようかなと考え

て、私は靴下を作っているんで、「じゃあその靴下で物々交換しようかな。」という割と小さな単位で物々交換をしたり。それをもう少し広げてやっていけたらいいよね、と友達の間で話しています。

まじ全体じゃなくて、小さくても、価値観を共有できる人たちで、貨幣価値ではない、物や時間を分かち合うようなコミュニティができればいいなと思っています。そのためには、一人ひとりの信頼関係が大切なんですよ。

編集部：今日は貴重なお話をありがとうございました。(終)



セキ コリヲさん
デザイナー。
雑貨ブランド「salvia」主宰。
<http://salvia.jp/>